

コニのニは恐らく丹であらう。ハの古代音はバ・ファである。ファとフォは普通で同じである。フォ（ホ）は火である。コ（子）は生れたものをさす言葉である。然らばバコニ・ファコニ（フォコニ→火子丹）は火から生れた丹である。火山にある天然丹がそれである。したがってバコニ（ファコニ）の存在する地がバコニ（ファコニ）と呼ばれるようになり、バコニ→ファコニ→ハコニ→ハコネと変っていったと考えるのである。

（横須賀市博物館・横須賀市立工業高校）

吉井城山貝塚人の持っていた顔料

赤 星 直 忠

横須賀市吉井城山第一貝塚上部貝層は縄文中期加曾利EⅡ式土器を包含している。この土器を残した貝塚人が持っていた顔料には、丹・黒・白があったろうことが遺物から推察できる。丹は所謂丹塗土器とよばれるものにみることができる。丹（酸化第二鉄）は沈澱褐鉄鉱（水酸化第二鉄）を七〇〇度Cくらいに熱することによって得ることができることは縄文早期に既に知られていたらしい。天然の丹は火山地方から得られた。それらの丹に獸脂などをまぜて油性顔料を作ったと考えられる。中期・後期土器片中に度々その内面に黒色のものが一面に固着しており、洗うと黒い水が流れだすことを知っているであらう。煤がたまっているのだときめているようだがあの黒色は土器内に保存されていた黒色顔料の名残だと解されないか。当時もっていたとしたら炭などをすりつぶしたものに獸脂などを混じて作った油性顔料だったと思う。土器中の顔料を全部使ってしまったも尚内面に付着していたものが土器破片になっても残っていたものであらう。吉井城山第一貝塚中間層中から検出された無文淡褐色土器片（関山式か）に径七ミリくらいの黒色珠文六個が二行に描かれているのがある。これは縄文前期に黒色の描文が存在した好資料である。縄文前期に既に黒色顔料を持っていたことが確かである以上、中期・後期の吉井貝塚人が黒色顔料をもっていたであらうことは充分推察できよう。吉井第一貝塚上部貝層出土の加曾利EⅡ式土器片中に二片の白塗土器がある。一片の方は表面がけずれて白色が残存する程度であるが、一片の方は極めて明瞭に残存している。貝層内にあった土器片中には貝片がこびりついて白くなったものがあるが、この断片はどう見ても白色顔料を意識的に塗ったものとみられるものである。彼らが白色顔料をもっていたかどうかは今までわかっていないことのようにだが、丹色顔料や黒色顔料をもっていたことの確かな彼らが貝殻（焼いたものを原料にした）をすりつぶしたものを原料として、白色顔料を作ることとは容易なことであったはずである。彼らが白色顔料をもっていたことは推察できることである。前述の白色に塗られた土器片はこれを証拠だてるものである。顔料の製法を知っていた彼らが認識することのできた色彩をすべて顔料とすることができたであらうことは推察される。沈澱褐鉄鉱を焼いて丹を作ることを知っていた彼らは丹の原料である沈澱褐鉄鉱の黄土色を充分認識していたはずであるから、これを美しい色の一つであると意識したとしたら、黄土色顔料も持っていたと考えてよからう。即ち中期以後の吉井貝塚人は丹・黒・白・黄土の四色は少なくとも顔料として持っていたと考えてよいであらう。

(註)

- 1、赤星直忠「横須賀市吉井城山第一貝塚の丹について」横須賀市博物館研究報告人文科学第六号、昭和三十七年三月刊。
 2、註1及び赤星直忠「吉井城山貝塚の丹彩土器について」横須賀市博物館研究報告人文科学第七号、昭和三十八年三月刊。

遺物発見地名表(六)

横須賀市須軽谷・西原	縄文式土器片(野島式)・石鏃	赤星直忠
同 津久井・高田	同 (無文・条痕)・黒曜石片	同
同 富士見町二丁目(山上畑)	同 ・石鏃	小暮慶明
同 佐原町佐原城址	弥生式土器片	同
同 佐野町四丁目ビワ山団地	同	同
三浦市三崎町藤ガ崎	縄文式土器片(野島式)・弥生式土器片 (宮台式)・土師器片	浜田勘太
同 南下浦町松輪・とうつ山	同 (夏島式・諸磯式)	岡本勇
同 同 金田・雨崎	同 (田戸下層式)	同
同 同 同 小浜(寺山)	同 (三戸式)	横須賀考古学会
同 同 同 雨崎洞窟	弥生式土器片(後期)	同
同 同 大浦山洞窟	同 (宮台式・久ガ原式・前野町式)・卜骨・釣 針・骨鈎・鹿角製廻転鈎・髪飾棒・貝輪・土 師器片(五領式・真間式)・須恵器・灰釉陶器	同